



Title	Milton's Pastoral and Nature in His Early Poems
Author(s)	金崎, 八重
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58537
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	かな ぎさ や え 金 崎 八 重
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 4 2 8 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 23 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	Milton's Pastoral and Nature in His Early Poems (ミルトン初期詩におけるパストラルと自然)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 服部 典之 (副査) 教 授 森岡 裕一 准教授 片渕 悦久 准教授 石割 隆喜

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、英文学史上最も偉大な詩人の一人であり、イギリス17世紀に活躍したジョン・ミルトンを取り上げ、文学的評価の定まった『失楽園』などの後期作品群ではなく、パストラル作品が多い初期詩を再評価する試みである。ミルトンの初期詩はルネサンス時代のパストラルの伝統と自然観を背景としているが、先人達が作り上げた伝統的な「型」の中にミルトンがとどまっていただけではなく、自らの独自性を獲得していったことを、代表的初期詩の読解を通して解き明かした研究である。論文は、序論、本論6章、結論、および参考文献から構成されており、全体で英文にて139頁、和文400字詰め原稿用紙に換算して約480枚に相当する論文である。

「序論」では、ミルトン文学を青年期、クロムウェルのラテン語秘書時代、老年期、に分け、その各々が「パストラルの時代」「政治パンフレットの時代」「叙事詩期」と呼ばれることを指摘した後、ミルトンが読まれなくなった現代に、等閑視されている初期詩を再

検討することで、ミルトン再評価を試みるのが本論の目的だとしている。特に初期詩を集めたコレクションである『1645年作品集』の詩の分析が重要であると指摘される。

第一章でパストラル伝統と自然観の変遷を文学史において辿った後、第二章では「キリスト降誕の朝に」を論じ、伝統的<キリスト降誕によせるオード>から逸脱している点として、キリストより彼を取り巻く世界の描写が中心となる点、詩人本人が詩の中で完全に不在である点、そして新たな賛歌が加わっている点が指摘される。その上で、ミルトンがキリストの生誕を大きな変化の端緒に過ぎないものと考えているとし、来るべき新世界の到来を予見する詩であると位置付ける。第三章では、「快活なる人」と「沈思の人」という従来は正反対の特質を持つとされてきた二つの詩は、確かに前者の語り手が観察者に徹しており受動的なのに対して、後者は自己を主張するという違いはあるにせよ、どちらの語り手（詩人）も他人との関わりを避け、どちらも孤独であることから、本質的には共通性を持つことを論じた。第四章では、仮面劇「コーマス」が扱われ、従来の仮面劇と比べて、この作品が歌や舞踏の場面が少ない点や、貴族への賞賛が欠落している点で異なっているとする指摘を行う。また様々な自然の要素が入り込んでおり、精霊が描き出す「アルカディア的自然」とレイディが主張する「造られた自然」の二者に、コーマスの語る「無秩序な自然」という、人が造り出す自然が介在してくる様を論じ、人の自然は敗北するとはいえ、ミルトンが自分自身の自然を描いたという点で、彼の自然観確立の上で重要な一歩を刻んだ作品であると結論づけている。

第五章では「リシダス」という、友人の死を悼む牧歌調哀詩が論じられるが、特にパストラルとの関連で、過去の回想部分とエピローグに着目する。この二つの部分に関して先行研究は、共通した牧歌的光景だとしているが、本論文では、エピローグでの時間はアルカディア的循環的なものではなく、直線的な時間の流れが見られるとし、それが未来へと向かう別の世界の現出を可能にするのである、という独自の見解を示した。第六章では「デイモン墓碑銘」が論じられ、この詩においてミルトンは、これまでの初期詩でどうしてもギリシャ・ローマ詩や神の支配する伝統的パストラルから自由になれなかったものが、始めてそこから脱却し、自らの自然観を確立した記念碑的作品であると位置付ける。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、ジョン・ミルトンの初期詩（1629～1639）の主要作品を年代順に丹念に論じ、この詩人が伝統的パストラルをどう変質させたかをその自然観の発展と共に論じたものである。ミルトンの初期詩に集中した議論はこれまで行われることはなく、その中に詩人の成長を読み込んだ独自性は高く評価できる。「キリスト降誕の朝に」ではキリスト降誕後の自然が全能の神の造ったものに回帰しており、「快活なる人」と「沈思の人」では、伝統的パストラル古典牧歌の側面から抜け出せていないのだが、「コーマス」ではミルトンが独自の自然観を確立する第一歩を踏みだし、初期詩最後の「デイモン墓碑銘」では、

ルネッサンス・パストラルやギリシャ・ローマ牧歌的側面、さらには神の支配する世界から完全に抜けだし、独自のパストラル形式を確立し、人間中心の自然観を持つに至ったとする。この洞察はオリジナリティ溢れるものであり、特に先行研究では「キリスト降誕の朝に」や「デイモン墓碑銘」が真正面から論じられることが少なかつただけに、本論文の価値は高いと言える。

ただし、本論文において問題がないわけではない。伝統的パストラルの記述が明快でない点と、ミルトンの詩人としての発展が、必ずしも明示的に議論されていない箇所が多いことも問題だと言えるだろう。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。